



過去問の活用について

三国志の英雄・曹操(そうそう)が、全編に注を付すほど愛読した、古代兵書の最高峰『孫子』。中でも最も有名な一節が「彼を知り己を知れば百戦殆(あやう)からず。……彼を知らず己を知らざれば、戦う毎に必ず殆し」だろう。過去問に取り組み意義は、この言葉に尽きていく。

彼を知ること。スポーツにたとえれば、対戦相手やルールも知らず戦いに挑むのは、不利を通り越して無茶である。航海にたとえれば、目的地がどんな場所か知らずに出発するのは、無駄ばかり多くかつ危険である。過去問に取り組みことで、私たちは初めて試験内容と範囲・出題形式(記述と選択肢の比率)・出題傾向・難易度・問題数と時間のバランスなど、向き合う相手のことを実感を持って知ることができる。



己を知ること。自分の得意・不得意だけでなく、のびしろを含めて、現在の等身大の自分の実力を露わにすること、これが過去問演習のもう一つの目的である。それゆえ、もう少し副教材を進めてからとか、学校で範囲を習ってからとか、ぐずぐずと過去問に取り組み時期を遅らせる人間は、ありのままの自分に直面するのを怖がっているだけなのだ。このような「やればできる」という幻想に長く浸っていたいという

姿勢は、本格的な受験勉強への突入を遅らせるだけの逃避行動である。

受験生にとって最も希少な資源とは何か? 時間である。そのためには無駄な勉強を最小化して、効率を高める必要がある。過去問にいち早く習熟することで出題頻度の高い問題を、出題パターンに沿って勉強することが可能になる。過去問をマスターすれば、教科書を見ただけで入試に出る可能性が高い・低いだけでなく、どのように問われるかまで分かるようになる。このように過去問学習は適切な時期にスタートし、以後定期的に演習を積み重ねることが肝要である。

ただし、注意しなければいけないことがある。一つ目、過去問演習は必ず時間を測って行う。公立入試では特に時間との戦いになるのは国語である。どの問題にどれだけ時間を割くのか、何を優先して解くのか自分なりの戦略をたてて挑み、どうすれば一番いい結果が出せるか検証を続けよう。難度が高く捨て問が多い私立入試も同様である。たとえば、制限時間が来た後は、鉛筆ではなくボールペンで解答を記入し、時間があれば解けたはずの問題を見つけておくのがいいだろう。

二つ目は、得点結果に一喜一憂しないことである。「未来を見るな、未来を変えろ」。これが過去問に取り組み際の基本姿勢である。模擬試験や過去問の結果に「未来を見て、受かると浮かれたり、落ちると動揺したりするのは無駄である。それらは「未来を変える」為に活用すべきものだからだ。大切なのは、〇付けを行った後、解説まで読み込み、関連事項やパターンを押さえ、類似問題や同レベルの問題では落と

さないというところまでつなげられたかどうかである。真の過去問の学習は、問題を解いて終わりではなく、そこが始まりなのである。

三つめは、自身の弱点を知ったら、時間を優先的にあてて取り組むことである。決して得意科目に力を注いではいけない。諸君は「パレートの法則」をご存じだろうか。社会や経済において物事は平均的に存在するのではなく偏在しており、重要な一部の事象が、全体の大半を占めるという経験則で、二対八の法則とも言われる。例えば全商品の中で上位二十%の商品が売上の八十%を占めているように、入試問題の頻度も良く出る二割の問題が八割を占めている。

このことは八十点の科目を百点まで伸ばすには、めったに出ない難問・奇問の勉強に多くを割くことになり、八十点とるのにかけた勉強量の四倍の時間を必要とすることを意味する。実際には入試までそれだけの時間はなく、五点〜十点上げるのみに終わることが多い。それに対し、もし同じ時間を四十点、五十点しかとれない苦手な科目に当てていけば、総合得点は得意科目の何倍も上げられるのである。

このことは、平均点が高いためボトルネックで合否が左右される公立入試でとりわけ重要である。ボトルネックとは、物事がスムーズに行かない場合の遅延の原因が特定部分にあり、他所をいくら向上させても状況改善が認められないケースをいう。例えば渋滞の原因が特定区間の狭い道にある場合、他の箇所で道路をいくらか拡張しようと改善は見込めない。過去問を解くことにより、このような自身のボトルネックを洗い出し、そこに時間を集中できた者が勝利を得るのである。

(片岡)

私たちはなぜ勉強しているの?

「勉強って何のためにするの?」

君たちも一度はこんな質問を先生、あるいはお父さん、お母さんに投げかけたことはないだろうか。少なくとも疑問に思ったことはあるだろう。私自身、生徒から何度この質問をされたかわからない。しかし、同じ質問を何度もされてうんざりした、なんてことは一度もない。それは、その疑問が単なる好奇心のようなポジティブな感情、あるいは勉強なんてうんざりだ、というネガティブな感情から生まれたものだとしても「自分は何のために勉強するのか」という疑問と向き合い、自分なりの答えを探すことは非常に意味のあることであり、その手助けをすることも我々講師の重大な使命だと考えているからだ。



そもそも、君たちがそのような疑問を抱いてしまう原因はなんだろうか。その多くは「勉強がつまらない」と感じているからではないだろうか。ではなぜ、勉強がつまらないのか。私なりの一つの回答は「自分にとって、どんないいことがあるかわからない」からだ。例えば、自分が一直線の道を走っている姿を想像してみよう。このとき、あらかじめ走り出す前に「この道を20km 走りきる」ことが出来れば、その先で君は今一番欲しいものをなんでも手に入れることが出来る」と言われたら、走ることにそれほど好きでない人でも、それなりにやる気も出るだろう。しかし、それを誰も教えてくれないとしたらどうだろう。なぜ、自分がやらなければならないのか。一体いつまで続けなければならないのか。それすらもわからない

ことをやり続ける。こんなに辛いことはないだろう。ここで、君たちにもう一度考えてみてほしい。君たちは本当に勉強自体が嫌いなのか。もしかすると、「勉強」が嫌いなのではなく「やる意味がわからないことを続ける」ことが嫌いなのではないか。だから、もし君が勉強はつまらない、やる気が出ない、と感じているならまずは「勉強は何のためにするのか」を考えてみてほしい。あるいは学校の先生、塾の先生、お父さんやお母さん、色々な人から話を聞いてみてほしい。きつと、様々な答えが返ってくるだろう。もちろん、答えは一つではないし、どれか一つに決める必要もない。沢山の意見を聞いて、深く考えたうえで、改めて「勉強」と向き合ってみてほしい。

最後に、私なりの一つの回答を紹介しようと思う。例えば、君が野球部のエースだったとする。そこで、自分はピッチャーだからと言って毎日ひたすらボールを投げ続ける。それだけで本当に試合で活躍できるだろうか。おそらくそれは無理だろう。なぜか、速いボールを投げるにも、それを狙ったところに投げるにも足腰の強さや全身の筋力が必要だからである。では、それらはどうのようにして鍛えることが出来るのか。足腰の強さは走り込みで、筋力は腕立て伏せや腹筋などの筋力トレーニングだ。実際には試合中に腕立て伏せや腹筋をする機会などはないだろう。だが、試合で活躍するためにはそれらのトレーニングは必要不可欠だ。勉強はこのトレーニングと似ているのではないか。理科で学ぶ「化学変化」や数学の「方程式」など、今学校や塾で学んでい



ることのほとんどは、将来使うことはないかもしれない。しかし、それぞれの科目で様々なことを学ぶ。それによって、色々な角度から違った方法で脳や心を鍛えることができる。そしてそれは、将来君たちが望む場所で、やりたいことで活躍するための大きな力になるだろう。

(中光)

集団知④

●集団知(知っている、知らないに関わらず集団として受け入れた価値観・判断)の続きである。

●さて、大学入試の共通テストは予定通り、新形式の問題で実施されるようである。困ったことである。世の中の大きな施策は「力のある人達の思いつき」から始まるのであるが、今回の改革も同じ。

●で、その思いつきを象徴する発言をとりあげてみる。「一点差で合否が決まる入試はおかしい。」「ある有名大学の学生が『自分は暗記で大学に合格した』と書いていたが、こんな入試は変えて、思考力を見る入試に変えないといけない。」「学力だけでなくもつと多面的な力を見る入試にすべきだ。」「筆記試験だけでなく面接や小論文など様々な角度から評価すべきだ。」「等々。●こういう意見については様々な疑問がわいてくる。教育に深く関る立場にあれば、おそらくかなりの人が抱く疑問であろう。まず、何点差なら公平なのかということだ。そして、面接・小論文などを課したとき、それも点数にするはずだが、この点数は非常に危い。同じ面接官が、全員を担当すれば(実際には無理だが)その面接官の視点による公平性は担保できても、対人

関係が苦手な生徒は不利となる。小論文についても同じ担当者が採点することはありえない。現実には何十万人という受験生が一月余の間に、一人で何回も受験するという状況では、面接も小論文もその実施は非常に厳しい。アメリカの有名大学は、何カ月もかけて様々な方法で、生徒の入学資格を審査する。いくつもの論文・レポート・面接を経て合否が決まるが、その手間は、文系でも、年間七百万とか八百万とかになる納入金を背景にしている。

●「暗記」についても、大きな誤解がある。化学の元素記号は、これは丸暗記するしかないだろう。都道府県名も丸暗記するしかないだろう。しかし、受験勉強全般でいえば、丸暗記のできるものは不可能である。おそらく90%以上の内容は「理解したものの暗記」もしくは「丸暗記したあとの理解」である。ただし、有名大学に合格した人の中には、例えば『社会』は暗記だから。」という人も多いのも事実である。それは、「記憶の仕組」についての認識がないからであって、その人も「理解したものの暗記」「暗記したあとの理解」を実践していたはずだ。

(以下次号)

(小林)

「三才」

●三才である。ほとんど外出はしない。いつも私のそばにいる。かわいいのだが、ときどき一人にしてくれと思う時もある。



●私が少し疲れを感じて仰向けに寝ると、「チャンス」とばかり近づいてくる。そして私の腹の上に乗る。重い。三才だ

から。我慢していると、いつのまにか眠りにつく。そしていびきをかく。重い、うるさい。そつとおろして、私がうつぶせになると、今度は背中につてくる。重い。

●かくれんぼが好きである。といつても極めて単純。ドアの隙間から足をちよつと出すと、全速力で走ってくる。危いぞ。でも、「もつとやれ。」というアピールをするから、また別のドアから足を出してやる。こつやつて数分。疲れる。

●私がトイレに行こうとすると気配を察知してトイレに向かつて走り出し、トイレの前で待っている。ドアを開けると先に入ってしまう。結局一緒に用足しをする。面倒くさい。

●別の部屋に物を取りに行こうとすると走り出す。また先に行つて待っている。ただ本をとりに行くだけだから、何でついて来るの。ずっとは遊べないんだぞ。

●風呂呂に入る時も、必ずついて来る。一人で入りたいのに。お前は、今日は洗つてあげないから。そこに座っている。

●私が外出しようとするとうと大変。連れて行けど飛びあがって甘える。いやいや、これから仕事だからね。無理だよ。

●夜、仕事から帰ると、玄関で待っている。おい、もう夜の十一時だぞ。寝てる時間だぞ。カミさんによれば、「さつきまで寝ていた。あなたの自転車の音がしたら、起きて迎えに行ったのよ。」ちよつとうれい。

●三才。名前は「ミーコ」という。体重は4kg。人間ではなく、ネコの紹介でした。

(小林)

